

地域再認識手法としての校歌の可能性 -愛媛県西予市野村町を対象として-

加藤 愛奈¹・片岡 由香²・杉田 篤史³

¹ 非会員 愛媛大学 社会共創学部環境デザイン学科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町3)
E-mail: i003010b@mails.cc.ehime-u.ac.jp

² 正会員 愛媛大学講師 社会共創学部環境デザイン学科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町3)
E-mail: ktaoka.yuka.kq@ehime-u.ac.jp

³ 非会員 (株)hamo-labo 代表 (〒249-0006 神奈川県逗子市逗子 1-6-27 ピアーズビル 402)
E-mail: info@hamo-labo.co.jp

少子高齢化の影響により地域の学校の統廃合が進み、過疎化が進む地域においてさらなる深刻な人口減少に繋がる状況にある。地域を維持していくためには地域の満足度や定住意欲の向上が重要となるが、それらを押し上げていくために、地域愛着の醸成が重要であることが指摘されている。地域愛着の醸成に必要な要素としては、風土接触や世代間交流等が挙げられる。そこで、本研究では「校歌」に着目し、校歌を歌うことで地域愛着を醸成できるのかを明らかにするため、校歌ワークショップを開催した。校歌にはその地域ならではの語句が含まれていることが多いため風土への接触や、学校行事などを通じて多くの人が知っているという特性もあり世代間交流を図ることもできると考えられる。校歌ワークショップ実施前と後の計2回アンケート調査を行い、校歌を歌うことで心情にどのような変化があるのかを明らかにすることで、校歌による地域再認識手法としての可能性および地域愛着への影響を明らかにすることを目的とする。

Key Words: school song, attachment to the local area, closed school, time perspective

1. はじめに

(1) 背景と目的

少子高齢化が急速に進む地方都市では、深刻な人口減少に陥っており、多くの地域において過疎化による様々な地域課題が生じ、課題への対処や地域の維持にむけた地域振興の取り組みが進められている。しかしながら、過疎化が進む地域においては、地域の学校の統廃合が進んでおり、進学を機に都市部などに移住せざるを得ない状況となるなど若者の流出にも繋がるため、将来の人口減少にさらに影響を与えることが懸念される。

地域を維持していくためには、地域住民の地域に対する満足度や定住意欲の向上が重要となるが、それらを押し上げていくためには、地域愛着の醸成が重要であることが指摘されている。また、地域愛着の醸成には、地域風土への接触¹⁾や、世代間交流を増やすこと²⁾が、先行研究において有効とされている。そこで、本研究では、地域によっては郷土の歌としても親しまれていた「小学校の校歌」に着目し、地域愛着度を向上させることに影

響を与えるのか、また、学校の校歌を歌唱することで地域を再認識することに繋がるのかを明らかにしたい。

校歌を改めて歌うことによって当時小学校に通っていた記憶や実際に校歌の歌詞に出てくる山や河川などの地域の事物を思い出すきっかけとなり、この行為は風土接触と同様の効果があるのではないかと考えた。

校歌とは、その地域に関係する語句が歌詞に入っていることが多く、入学式や卒業式などの行事ごとが歌われることも多いため、生徒たちを通じてその地域の住民にとっても聴きなじみのあるものである。須田³⁾によれば、特に1930年代以降に作成された校歌については、郷土の事物や歴史を歌詞に含むなど、学校歌としてだけでなく、郷土の歌として親しまれていた地域もある。このような校歌の特徴を踏まえると、地域住民らで校歌を歌い再評価する機会を設けることで、世代を超えた交流を実現させることができれば、地域愛着の醸成に繋がるのではないかと考えた。本研究では、上記の背景と仮説に基づき、校歌を歌うことで生じるなつかしきの心理や世代間交流をきっかけに“まだこの地域に住み続けたい”

といった地域愛着の醸成や地域の再認識手法として有効であるかどうかを明らかにすることを目的とする。

(2) 先行研究

校歌をテーマとした先行研究として、小・中学校の校歌に表現される地域の特徴を明らかにすることを目的に、校歌の歌詞と学校の所在地および校歌の制作年との関係を検討した坂本らによる研究⁴⁾や、校歌の歌詞内容の変容を明らかにし、そのうえで1930年代に校歌が全国的に普及した背景に何があったのかを整理し、考察した須田珠生による研究⁵⁾がある。

また、本研究では、校歌の持つどのような特徴や要素によって、なつかしいと感じるのか地域の再認識手法としての校歌の有効性について明らかにしたいと考えるが、なつかしさに関する先行研究については以下がある。まず、「なつかしい」という感情が表出する理由について過去に誰もが歌った校歌を取り上げ、なつかしさを生起する仕組みについて検討した宮原らの研究⁶⁾などがある。また、須田による研究³⁾では、明治期から昭和戦前期までを時代対象として、校歌が学校や学校を取り巻く地域社会のなかで、どのような意味を持ったのか、校歌が学校にとってどのような意味を持ったのか、歴史的な視点から明らかにすることを試みている。

2. 調査方法

(1) 調査地概要

本研究では、過疎化が進み、かつ統廃合により地域の小学校が閉校した地区を含む地域として、愛媛県西予市野村町にある野村地区・大野ヶ原地区・惣川地区・中筋地区・大和田地区・横林地区・溪筋地区の計7地区を対象として、校歌がもたらす地域再認識の可能性について考察する。

対象地として取り上げた愛媛県松山市西予市野村町は、かつては愛媛県の西南部に存在していた町である。2004年4月1日に近隣の東宇和郡4町と西宇和郡三瓶町との5町合併が行われたため、自治体としての野村町は消滅し、西予市野村町となっている。

今回取り上げた西予市野村町に位置する計7地区のそれぞれの総人口数⁷⁾は、野村地区3,712人、溪筋地区783人、中筋地区726人、横林地区325人、惣川地区341人、大和田地区920人(令和6年7月31日現在)、大野ヶ原地区80人(令和2年10月1日現在)である。各地域において取り上げる小学校は野村小学校(野村地区)、溪筋小学校(溪筋地区)、中筋小学校(中筋地区)、河成小学校(横林地区)、惣川小学校(惣川地区)、大和田小学校(大和田地区)、大野ヶ原小学校(大野ヶ原地区)である。平成21年の西予

市教育委員会による西予市小学校再編計画(2009年)において、溪筋小学校、中筋小学校、大和田小学校、河成小学校の児童数の減少と複式学級の増加により西予市における適正規模とするため、現野村小学校〔野村小学校(仮称)〕に統合する計画となり、2015年に上記4校は閉校しており、現時点で小学校が残っているのは野村小学校、惣川小学校、大野ヶ原小学校の3校のみとなっている。現在も小学校が存続し続けている地域や、廃校になってしまった地域、その学校に通っていた住民の地域への時間的展望などについて違いが見られるのかを比較する。

(2) 調査方法

本研究は、先述の計7地区各地で「校歌ワークショップ」を開催した。調査実施日は表1に示した通りである。

校歌ワークショップ実施前に、参加者に事前アンケートに回答してもらい、ワークショップ後に事後アンケートへの回答を求めた。これによって、校歌に触れる前と後の心情の変化を明らかにする。

表1 開催地と日程

地区名	ワークショップ開催日
惣川地区	2024年2月25日
野村地区	2024年3月6日
中筋地区	2024年3月10日
大野ヶ原地区	2024年3月10日
横林地区	2024年3月11日
溪筋地区	2024年3月19日
大和田地区	2024年3月24日

a)校歌ワークショップの流れ

1)オリエンテーション(5分)

ワークショップのねらいと進め方を参加者に説明する。

2)アイスブレイク(10分)

簡単なボディパーカッション(手拍子や足踏み)で2~3パートに分かれ、互いのリズムパターンを聴きながら全体のリズムの調和を目指す。声に比べると心理的障壁が低いであろう手拍子などでリズムアンサンブルを形作る経験により、参加者の緊張をほぐし、その後のワークへの能動的な参加意識を高める。

3)校歌斉唱1(5分)

まずは特に指示も出さずに一度校歌を参加者に歌ってもらう。

4)ワーク1「歌詞について」(20分)

参加者に3人程度のグループを作ってもらい、事前アンケートの設問「歌詞の中で、あなたが地域らしさを感じる歌詞(フレーズ)について、○で囲んでください。」のそれぞれの回答をグループ内で共有した後、グループごとに全体に発表していく。

5)校歌斉唱2 (5分)

ワーク1を受けて2度目の斉唱。

6)ワーク2「メロディについて」 (20分)

参加者に3人程度のグループを作ってもらい、事前アンケートの設問「お住まいの地域の「校歌」について、歌っていて気持ちイイと感じるメロディ（思い出すとたまに口ずさむ）の箇所を、シカクで囲んで下さい。」のそれぞれの回答をグループ内で共有した後、グループごとに全体に発表していく。講師によるメロディと歌詞の関連などの解説も行う。

7)校歌斉唱3 (5分)

ワーク2を受けて3度目の斉唱。

8)ワーク3「校歌を忘れないために」 (20分)

校歌を忘れないためにどういった方法があるか？地域に歌い継がれていくためには？校歌を知らない世代へどう引継ぐか？といったテーマで参加者からアイデアを募る。付箋を配布して、参加者は出したアイデアを付箋に書いた後、模造紙に貼っていく。最後に出たアイデアを全員で、共有していく。

注) 括弧内の時間は、全90分のプログラムの場合における大よその所要時間を表す。

b) アンケート調査

本研究では校歌ワークショップの参加者に対してアンケート調査を行った。ワークショップ前とワークショップ後の二回実施し、校歌を通して地域に対する思いがどのように変化したのか比較することを目的とした。また、小学校が存続している地域と廃校になってしまった地域とで回答に違いがあるのかを比較し、学校の存在が地域に与える影響も考察したい。

アンケート調査は、①地域愛着、②存在意識、③時間的展望、④なつかしさ、⑤地域資源、⑥地域コミュニティの6つの項目に分けて行った。地域愛着、存在意識、時間的展望に関しては「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの5件法を用い、なつかしさ、地域資源、地域コミュニティに関しては自由記述とした。

3. 調査結果

今回実施したアンケートの回収率と有効回答率は表2の通りである。有効回答率は完全解答のアンケートのみを集計したものである。

表2 アンケート回収数と有効回答率

小学校名	アンケート回収数	有効回答率
惣川小学校	17	約82%
野村小学校	29	約62%

中筋小学校	8	約88%
大野ヶ原小学校	17	約76%
河成小学校	38	約92%
大和田小学校	16	約56%
湊筋小学校	15	約53%

今回は最もアンケート回収数と有効回答率が高かった横林地区の河成小学校を対象に、事前アンケートと事後アンケートに変化があるのか、地域愛着と時間的展望に関する項目についてT検定を行った。本研究の分析はIBM SPSS Statisticsにより行った。まずは、事前と事後の参加者の地域愛着の差異に関してT検定を行ったものを表3に示す。

この指標は「とてもそう思う」を5、「全くそう思わない」を1としているため、数値が高いほど地域愛着が高いと推測することができる。

表3 事前と事後の参加者の地域愛着の差異に関するT検定結果

	事前		事後		平均値の差	t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
選好	4.455	0.669	4.480	0.626	0.025	0.038*
感情	4.407	3.601	4.362	3.722	-0.045	0.361*
持続願望	4.385	0.758	4.308	4.900	-0.077	0.811**

*: $p < .10$ **: $p < .05$

横林地区にある河成小学校の地域愛着に関する平均値を合計すると、事前アンケートが4.441、事後アンケートが4.384となる。このことから、事後アンケートの結果は事前アンケートよりも-0.057となり地域愛着が下がっているといえる。しかし、誤差0.057であるため、横林地区における校歌ワークショップ実施前と後では、地域愛着について大きな変化は見られないと捉えることができよう。

次に、時間的展望に関する項目に着目し、地域愛着と同様にT検定を行った。その結果を表4に示す。

表4 事前と事後の参加者の時間的展望の差異に関するT検定結果

	事前		事後		平均値の差	t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
希望に対する項目(計8個)	3.6802	0.8681	3.7346	0.8524	0.0544	0.3955*
不安に対する項目(計10個)	2.5384	1.0819	2.3519	0.9644	-0.1865	-1.0537*

*: $p < .10$

時間的展望の質問項目の中で、まず最初に「毎日の生

活が充実している」「今の生活に満足している」「私には、だいたい将来計画がある」「私には、将来の目標がある」「将来のために今から準備していることがある」「私は、自分の過去を受け入れることができる」「自分の将来は自分でできりひらく自信がある」「私の将来には、希望がもてる」の希望に対する計8個の質問の平均値を比較した。事前アンケートの平均値は3.680、事後アンケートの平均値は3.734であり、このことから事後アンケートの平均値は事前アンケートから0.054平均値が上がっていることが分かる。このことから校歌ワークショップへの参加を通じて、住んでいる地域に対して希望を見出した人が少なからずいるということが推察される。次に、残りの不安に対する計10個の質問項目の平均値を比較した。事前アンケートの平均値は2.538、事後アンケートの平均値は2.351であり、事後アンケートの平均値は事前アンケートの平均値よりも0.187下がっていることが分かる。このことから、自分の過去や未来に対して後ろ向きな考えを持っている人が校歌ワークショップへの参加を通して減少したということが推測できる。

地域愛着に関する項目も時間的展望に関する項目もどちらも平均値の差はあまり見られなかったが、少なからず地域の校歌を歌うという行為は人の心を動かす力を持っていることが推察された。

4. 考察

今回は愛媛県西予市横林地区河成小学校で実施した校歌ワークショップでのアンケート調査の結果を取り上げ、平均値を比較した。その結果、事前アンケートと事後アンケートでは大きな変化は見られなかった。校歌ワークショップを開催するのは今回が初めてであったため、校歌を歌うことによる効果が十分に表れていなかったことが一つの要因だと考えられる。今後は校歌ワークショップを複数回開催し、住民同士で交流する機会を増やすことで、さらなる効果に期待できるのではないかと考える。令和6年9月と10月に二回目となる校歌ワークショップを7つの地域で開催する予定であるため、今回の反省を

活かしてより有意義なデータを収集できるようにしたい。

謝辞：本研究を行うにあたり、校歌ワークショップを運営いただいた西予市職員の皆様やアンケート調査にご協力してくださった地域の方々に深く感謝申し上げます。

5. 参考文献

REFERENCES

- 1) 鈴木春菜, 藤井聡: 「地域風土」への移動途上接触「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集D, 64巻2号, p179-189, 2008
- 2) 森島明日香, 金度源, 大窪健之: 祭りの行程への参加と地域愛着・世代間交流との関係性, 都市計画論文集, 58巻3号, p632-639, 2023
- 3) 須田珠生: 校歌の誕生, 人文書院, 2020年3月
- 4) 坂本優紀, 濱泰一: 校歌が歌う地域と時代—東京都八王子市の市立小・中学校の事例—, 地理空間 15-2 119-129 2022
- 5) 須田珠生: 近代日本の小学校にみる校歌の歌詞の変容と郷土との関わり, 音楽教育学, 49巻2号, p13-24, 2020
- 6) 宮原佐智子, 田和辻可昌, 松居辰則: 校歌の歌詞から感じる「なつかしさ」の生起モデルの構築, 日本感性工学会論文誌, Vol. 16No. 1, p109-119, 2017
- 7) 西予市: 人口・世帯数の推移,
https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/toukei_opendata/toukei/jinkou/index.html, (参照 2024-8-20), 2024-6

Aina KATO, Yuka KATAOKA and Atsushi SUGITA